

丹波市立植野記念美術館における 子ども向け染め技法ワークショップ実践報告

——布に模様を染める——

有 田 や え

Practical Report on a Dyeing Technique Workshop for Children at the Ueno Memorial Museum of Art, Tamba: Dye a Pattern on a Cloth

ARITA Yae

Abstract: This is a practical report on the dyeing technique workshops for children that were held at the Ueno Memorial Museum of Art in Tamba for two years in 2023 and 2024. The first workshop (2023) was a dyeing workshop using oil-based ink, and the second (2024) was a dyeing workshop using fresh indigo leaves. Both workshops aimed to create an opportunity for children to be exposed to new creative techniques and to experience the wonder of making patterns on fabric.

Key Words: Workshops for children, alcohol dyeing, indigo leaf beating dyeing

要旨：2023 年、2024 年の 2 年間、丹波市立植野記念美術館にておこなった子ども向け染め技法ワークショップについて実践報告を記す。第 1 回（2023 年）は油性インクを使用した染めのワークショップ、第 2 回（2024 年）は藍の生葉を使った染めのワークショップを行った。どちらのワークショップも、子どもたちが新しい創作技法に触れるきっかけを作り出すことを目的とし、なおかつ、布に模様がつく不思議さを感じ取れることを意図とする。

キーワード：子ども向けワークショップ、アルコール染、藍生葉たたき染

1. はじめに

博物館での子どもたちへのワークショップは、新しい視点や機会との接点ができる貴重な機会である。表現素材への新しい気付きや、知識を深めることができる。自分のアイデアを形にする機会に接することで、創造性を育むことができる。対話を通じて、子どもたちの好奇心や質問に直接答えてもらえるため、深い理解が促進される。また、コミュニケーションを通じて人間関係を築

き、協力やチームワークの重要性を学ぶことも可能である。ワークショップは、単なる知識の伝達だけでなく、実際の経験や人とのつながりを通じて、子どもたちの成長を多方面からサポートする重要な機会となる。「文化を大切にする社会の構築について」（平成 14 年 4 月文化審議会答申）でも述べられているとおり、豊かな人間性と多様な個性を育むためには、学校や家庭、地域において子どもたちが参加、体験できる様々な文化芸術活動の機会を充実することが重要であり、年間を通じて多種多様の文化に触れ、体験できる企画を作

成し、実施することや、美術館・博物館、劇場などにおいて子どもたち向けの企画を充実させ、学校においてその積極的な活用を図っていく取組みを進める必要がある。(文部科学省 2024)。このように子どもたちが参加できる、博物館でのワークショップは実際に現地に足を運び、社会を知る一環にもなり、また新しいテーマや分野に触れることで、子どもたちの興味や好奇心、創造力が刺激される機会である。本実践報告では、実際に行った 2 つのワークショップについて報告する。2 つのワークショップ共に布に模様をつけることを行う。

2. 「小さなかばん＊てんてんともようをつけてみよう」(2023)

アルコール染の技法を用いて、かばんに模様をつけるワークショップを行った。ワークショップを開催するにあたり、年齢層に幅がある場合でも集中して制作できること、制作をするにあたり、子どもたちが安全であること、布に模様をつける喜びを感じてもらうことに重点を置き準備を進めた。

2-1) 事前に用意しておくもの

模様をつける為の支持体、今回は綿布、小さなかばんを縫ったものを用意。油性ペン、模様を広げるためのアルコール(消毒用アルコール)、机を覆うカバー、スポイトがついている小瓶。(図 1)



図 1 アルコールが入ったスポイト付き小瓶

2-2) 導入

最初の導入時に、「今まで、布に模様をつけたことがある？」とまずは声がけを行う。「ある！」

「ない！」など様々な返答がある。例えば、「ない！」の声が多い場合、「何かこぼしてしまって、洋服にしみがついてしまって、洗濯してもらっても取れなかったことある？」「葉っぱや花をつまんで、汁をどこかにつけたことある？」等、子どもたちの経験を思い起こしてもらうような言葉を選び、ワークショップを始める。生活の中にも創作の種があることを伝える。ワークショップの時間制限もあるかと思うが、最初の導入が重要である。何かを作るワクワク感と、自分の経験をリンクさせる貴重な瞬間である。アルコールを使う為、アルコールアレルギーがないか確認。コロナ禍で消毒アルコールが身近になっていたためか、子どもたちは普段使用する身近なもので模様がつけられることに興味津々であった。

2-3) 参加者

年齢：2 歳から 16 歳、合計 28 名の参加者

2-4) 手順 1 (模様付け)

最初に模様と聞いて、どんなことを思い浮かべるかな？と声がけしつつ、油性ペンを用意する。そして、模様をつける小さなかばんを机に置く。小さなかばんは表裏、両方に模様を付けることが可能であるが、浸み込むのを防ぐために、カバンの中に、段ボールを挟んでおく。この段ボールが緩衝材となり、模様も描きやすくなる。基本的に自由に模様をつけてもらうのであるが、このワークショップの題名についている、「とんとんと」がヒントとなる。油性マジックを持って、まずはかばんにとんとんと模様を付けてみることを促す。絵が苦手な子、年齢が上がり上手く描かなければといった思いがあり、なかなか初めの第一歩が踏み出すことができない子どもたちに、まずはトントんと点をかばんに付けてみようといった声がけは非常に有効であると感じた。最初のトントんと点を打つことで(図 2)、次の表現は進めやすくなる。点の数を増やしたり、点のサイズ感を変化させたり、点の集合体で何かを表現したり、さらに点の色にこだわり、次々に色を変えて

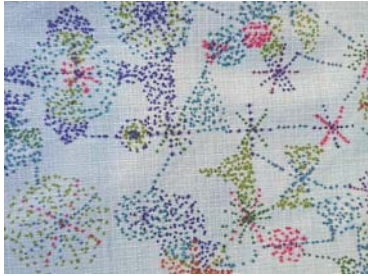


図2 油性マジックでてんと模様を付けた様子



図3 図4 油性マジックで模様を付けている様子



図5 図6 アルコールをスポイトで振りかける工程

表現する子どももいた。制作が進んでいくうちに暫くすると、こちらからも、「ペンを一緒に何本か持ってとんとんと模様をつけてみたらどう？」(図3)(図4)「両手で模様つけてみたらどう？」などと、模様をつける楽しみのヒントの掛けを行う。ワークショップの型の中にある自由度を上げてゆく。

2-5) 手順 (アルコールを油性ペンで模様を付けたところに振りかける)

ある程度、油性ペンで模様がついたところで、スポイト付きの小瓶に小分けしたアルコールをそっと振りかけてもらう。(図5)(図6)

アルコールを振りかけることで模様が広がり、

予測していない面白さが出てくる。その比較が以下の写真である。油性マジックで描いたもの(図7)(図8)その上にアルコールを振りかけた様子(図9)(図10)

例を挙げると、青の油性ペンで付けた模様と隣につけた赤の油性ペンの模様とがアルコールで混じり合い、美しいグラデーションが浮かび上がる。色彩の境界線が曖昧になる。子どもたちはその模様の広がり歓声をあげるものもいれば、スポイトを使う動作に面白さを感じ、何回もその動作を繰り返す子どももいた。

模様の広がり面白さや美しさが、油性ペンで計画的に描いた模様アルコールを加えることで偶然の表現が加味され、より複雑な模様や色彩の

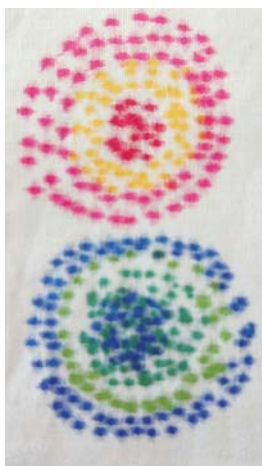


図7 油性マジックで描いた模様



図9 アルコールを振りかけた後：模様の変化



図8 油性マジックで描いたもの



図10 アルコールを振りかけた後：模様の変化

魅力を生み出している。(図11)(図12)

かばんの両面に模様を付けることができるため、表面に油性マジックで付けた模様がアルコールで広がり絵画的な表現も可能であることを理解した子どもたちは、裏面に物怖じすることなく、更に自由に楽しみつつ表現しているようであった。模様の種類(図13)(図14)

ワークショップは、単なる知識の伝達だけでなく、実際の経験や人とのつながりを通じて、子どもたちの成長を多方面からサポートする重要な機会となる。本ワークショップでも、沢山の子どもたちとのコミュニケーションをとることができた。またワークショップを通じて、自由に描いていいよと言われると困る、上手く描けないから苦手であるなどといった子どもたちの苦手意識を緩和するきっかけ作りが可能であった。

2-5) まとめ

手の動き、言葉がけのリズム、表現されるものの面白さ、美しさなど、本ワークショップには安全に楽しめる要素がある。また、最後にアルコールを振りかけることが、偶然に生まれる美しさに気付くきっかけとなる。子どもたちとの会話の中で、アルコールで油性マジックの色彩が広がる様子に「魔法みたい!」「卵にお醤油をかけたときみたい!」「砂に水をかけたらこんな風に広が



図11 子どもたちの制作風景



図12 アルコールを振りかけている様子



図 13 大きく広がる模様



図 14 丸く広がる模様

る？」などと、バリエーションのある会話が生まれた。

アルコール染の魅力は、その透明感と鮮やかな色合いにある。アルコール染は、アルコールが染料を溶解することで、鮮やかな発色を実現する。また、乾燥が早く、染料が定着しやすいのも特長である。このため、細かい模様やグラデーションを表現するのにも適している。子どもたちが制作した作品の一部（図 15）（図 16）（図 17）（図 18）（図 19）（図 20）（図 21）（図 22）（図 23）

子どもたちとの染めのワークショップは、創造力と学びの融合である。染めの工程を通じて、色の変化や模様の生成を目の当たりにし、自らの手で独自の作品を生み出す体験ができる。科学的な観察力や問題解決能力を育むと同時に、自己表現の場でもある。自由度が高い活動であり、子どもたちの個性が反映される場でもある。特に、自分たちで予測した結果と実際の染め上がりが異なる場合、その驚きや発見は学びの大きな契機となる。

3. 「藍の生葉を使って布にもようをつけてみよう！」（2024）

藍染には建て染めという方法と、新鮮な藍の葉をそのまま使って染める生葉染めの2つの方法がある。本ワークショップは、藍の生葉を使用して、布に模様をつける技法で行った。布は絹の布を用意する。藍の葉に含まれるインジカンが、空

気に触れると酸化しインジゴになる性質を利用する。インジゴは水に溶けない性質を持っており、この性質を利用して布に藍の生葉を使って模様をつける。藍の生葉をワークショップの現場で子どもたちに摘んでもらうことから始めた。布に葉を使って模様配置し、自然物を利用して模様がつく面白さに気付きを得て、自然と科学、そして芸術を融合させることができないだろうか。子どもたちにとって単なる染色の技術を学ぶだけではなく、多くの発見と学びを目的とする。

藍を使用した制作プロセスは自然の不思議を感じさせる。藍の生葉を使って染色する際、葉の中に含まれる色素が布に転写される過程は、化学的な反応の一環であり、科学の基礎を学ぶ良い機会である。子どもたちは、葉を叩くと色が変わる様子を観察し、その変化がなぜ起こるのかを考えることで、自然界の仕組みに対する理解を深めることができる。

3-1) 事前に用意しておくもの

絹布、藍の生葉（藍を育てた鉢）、軽量ゴムハンマー、テーブルに敷くもの、絹の布は紗のような薄い布と、しぼのある厚みのある丹後ちりめんを2枚重ねて縫ったものを用意した。本ワークショップの開催時期は7月であった。3月上旬から種まき、7月に成長した藍の葉を使用することができた。（図 24）（図 25）



図 15 完成作品



図 16



図 17



図 18



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23



図 24 2024 年 4 月藍芽が芽吹いた様子



図 25 7 月藍葉の成長過程



図 26 絹布をめくった様子



図 27 上下に模様が染まった様子

3-1-2) 参加者 年齢：9 歳から 14 歳の 14 名

3-2) 導入

事前に、ワークショップを行うテーブルの隣に子どもたちの視線からよく見えるように藍の鉢植えを配置する。ワークショップが始める前に、「この葉、見たことある?」「触ってみる?」等、植物に対する興味を促す。(図 28)



図 28 会場設置の様子

3-3) 手順 1 藍の葉を摘む

藍の葉を実際に子どもたちに摘んでもらう。ちぎってよいのかおそろおそろ触る子どもにも、「自由に摘んでいいよ」「模様をつけながら摘んでもよいよ」などと声がけをする。

3-4) 手順 2 藍の葉を絹布の上に構成して置く。 (布と布の間に挟む)

薄い布と丹後ちりめんの片側を縫ったものを用意する。そして最初に薄い布を開ける。次に丹後ちりめんの上に摘んだ藍の葉を自由に配置し、構成する。構成途中で、藍の葉に穴を開けて模様を作ったり、または、葉をちぎって配置したりすることも可能である。(図 34) (図 36)

3-5) 手順 3 模様付け

藍の葉の配置、構成が完成したら次に薄い絹布を閉じ、2 枚の布で藍の葉をそっと挟む。(図 26)

(図 27) 上部の布が薄い絹布(紗)の為、構成が透けて見え作業がしやすい。上から軽量ゴムハンマーでとんとんと力を加える。(図 29) (図 30)

葉の汁が徐々に紗の方にも染み出てきて、布に模様がついてきているのが判る。とんとんと叩く際に、細かく力を加えるのがコツであると伝えると、かなり集中した時間となる。また、本のように片方を閉じて縫っており、上部と下部の布がずれにくく、作業の途中で 2 枚の布を開いて藍の葉を摘んで、デザインを足したり、配置に工夫したりすることが可能である。軽量ゴムハンマーを使って模様をつけるため、音がリズムを刻む。作業が進むにつれ、最初に叩いて付けた葉の色が黄緑色から徐々に濃い深緑色に変化してゆく。作業中にもゆっくりとした色の変化を観察することが可能である。



図 29 叩いている様子



図 30 細かく葉を叩く様子

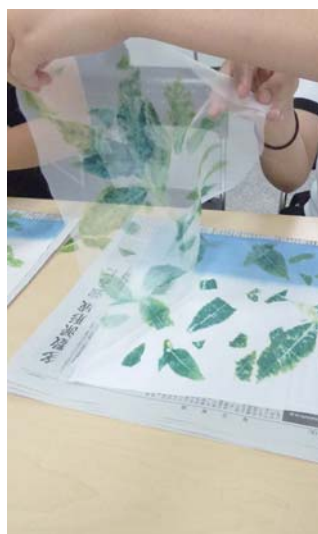


図 31 図 32 布を開け中に挟んだ藍の葉を取り出す

3-6) 完成

全ての行程が終了し完成したら、上下の布を開けそっと間に挟んだ葉を布からはがす。(図 31) (図 32) 叩いた葉、藍の葉の葉脈がとても美しく残ることがある。時間があれば、30 分程そのまま放置して、最後に石鹸水で軽く水洗いし、乾燥させて完成である。

3-7) まとめ

作業の手順としては複雑ではないのであるが、非常に子どもたちがじっくり集中して作業を行っていた。最初に配置を完成させてこつこつ作業を進める子どももいれば、作業の途中で藍の葉を摘みながら配置を変化させて制作する子どももいた。現在、子どもたちの遊びにどのぐらい自然物が取り入れてあそばれているのかという問いがある。本ワークショップの中で驚くほど集中力をみ



図 33 完成作品



図 34



図 35



図 36

せる子どももあり、配置、挟む、叩くといった一連の作業に何か魅力があるのか、単純な動きで表現することに、子どもたちの楽しみや喜びがあるのではないかと推察された。

叩いた後の藍の葉に、子どもたちの気付きがあった。2枚の布を開いて葉を取り出すときに「あんなに叩いたのに、形が残っている」「葉脈が透けて綺麗」といった言葉があった。叩いた後の葉を「持って帰っていい？」この言葉は想定しておらず、何か挟んで持って帰る和紙等の用意が必要であった。小さなものに美しさを感じる感性や美意識はこのような短時間のワークショップでも感じるきっかけになる可能性が見出された。上の絹布は紗のため薄く「天女の羽衣みたい」という感想を述べる子どももあり、絹布の質感の違いを感じることができた。また、藍の葉を外した後に絹布の2枚を重ねてみると、微妙にずれが生じ、そこに空間が生まれ、色の重なりに一層藍の色の美しさがあった。(図 33) (図 34) (図 35) (図 36)

4. 終わりに

2年間、丹波市立植野記念美術館にてワークショップを行わせていただいた。両ワークショップ

共に、布に模様をつける作業を行ったのであるが、そのような場所で開催されることは、子どもたちがワークショップを通じて、探究心や好奇心を刺激することができると推察される。地域にある博物館や美術館で行うことは、子どもたちの新しい気付きのきっかけの一つになる重要な教育の一環である。また、事前予約不要のワークショップという形式にすること、「地域のお祭り」のようにふらっと参加できる楽しくわいわいとした雰囲気のイベントにすることが美術館の目指す事柄の一つであった。

1年目はアルコール染、2年目は藍の生葉を使用したたたき染を行ったのであるが、アルコール染は色彩豊かな作品に仕上がりと、藍の生葉たたき染は青緑色のみの構成ではあるが葉の配置を工夫することで豊かな表現になった。どちらも布に模様をつける喜びを、とんとんとリズムよく叩く身体的動きと共に子どもたちに実感してもらえた。模様をつけることは、単純な身体的な動作で可能であり、かつ魅力的である。制作する集中力、ワークショップの中に濃密な探求心、表現欲への手掛かりがある。

染色作業の多くは行程が多く、水を使う作業が伴うことが多い。今後はその辺りを考慮したワー

クショップを行うことが課題である。

謝辞

ワークショップを行うにあたり、貴重な機会と多大なご支援を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

丹波市立植野記念美術館 太田嘉宏 館長

丹波市立植野記念美術館 足立良二(元)館長

丹波市立植野記念美術館 永山宗史 学芸員(教育委員会教育部美術館事務局) 荒木孝典先生

参考文献

かんたん染色 天然染料の手引き 北川一寿 株式会社千寿 2022

よしおか工房に学ぶ はじめての植物染め 紫紅社 2011

たねから育てるあいの生葉染め絵本 文/箕輪直子

絵/有賀潤子 1997

草や木のまじゅつ 山崎青樹/文 石曾根史行ほか写真 福音館書店 1985

自然の色を染める 監修 吉岡幸雄・福田伝士 紫紅社 1996

自然に学ぼうー草木染めと手漉き紙ー 高岡昭 鳥本昇 広瀬月江 浅田宏子 谷村載美 野村珠代 共著 絵・岸本尚美 株式会社近代文芸社 1997

草木染技法全書1 糸染・浸し染の基本 山崎青樹 美術出版社 1997

草木染野帖 大場キミ 求龍堂 1983

アイの絵本(そだててあそぼう)著/仁科 幸子 編集/日下部 信幸 農山漁村文化協会 1999

ありた やえ

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科非常勤講師